沖縄の音色

新垣 俊道

「沖縄は飛行機を降りたら、すぐに三線の音色が聞こえてくる」。そう話されたのは、地唄・生田流箏曲の家元であり、人間国宝の二代目富山清琴先生だ。今から二年半ほど前の琉球舞踊家・佐藤太圭子「師籍五〇周年記念第一五回佐藤太圭子の会」公演の打ち上げでの出来事であった。さらに先生は「三線の音色が身近に聞こえるのは、あなた方は気付かないかもしれないが、すごいことだ。本土で、沖縄のように身近に三味線の音色が聞こえてくるというのは、なかなかない」と続けた。

確かにそうだ。沖縄では観光地をはじめ、スーパーや近所を散歩している時にでも三線の音色が聞こえてくる。また、テレビやラジオのローカル番組やCMでも三線の音色は頻繁に流れる。民謡酒場も多くあり、毎晩のようにライブが行われている。その他にも結婚式や新築祝い、運動会、エイサー、十五夜などなど。思い出してみると、至る所で三線の音色が聞こえ、生活に大きく密着していることが分かる。

一四世紀末ごろに中国から琉球へ伝来したとされる三線。琉球王国時代は宮廷音楽、士族の教養として発展し、廃藩置県後は民間へと普及していく。沖縄戦では沖縄全土が焦土と化したが、捕虜収容所では空き缶とパラシュートの糸を弦にして、カンカラー（空き缶）三線をつくり演奏し始めた。それが、大いに人々を慰め癒した。戦後は三線人口が増え、近年では様々なジャンルに三線が取り入れられ、オキナワンポップスと呼ばれる新しい音楽も誕生している。その一方で、「三線弾ちゃー（三線を弾く人は遊び人）」と蔑まされてきた時代もある。

しかし、何故だろうか。いくら蔑まされても、今日まで多くの人々によって三線が弾き続けられているのは。背景には、その長い歴史があると考える。これまで激動の時代を乗り越えてきた三線。この間、大きな喜びもあれば、深い悲しみもある。その時代に生きた人々の喜怒哀楽が「チムグクル（肝心）」として三線に、そして音色や音楽に魂として宿り、それが沖縄人のDNAの中に深く残されていると信じている。三線を習い始めてから二二年。それを考えたとき、一年半前の富山先生のお言葉は衝撃的であり、今でも鮮明に思い出される。

私は琉球古典音楽の演奏家。演奏技術はもちろんのこと、先人達と繋がり「チムグクル」を共有することが真の演奏家ではないだろうか。たかが三線、されど三線。「チムグクル」探しの旅は、これからも続く。

プロフィール
1979年沖縄県生まれ。琉球古典音楽演奏家。沖縄県立芸術大学非常勤講師。国立劇場おきなわ第一期組踊研修修了。国立劇場開場45周年記念「おきなわ芸能の今、そしてこれからⅣ」、国立劇場おきなわ開場10周年記念「組踊 大川敵討」などに出演。主な作品は「琉球舞踊曲集 野村流」（国際貿易）、「沖縄の伝統芸能 組踊 執心鐘入」（日本ウエストミンスター）など。

月刊 みんぱく
7月号目次

1 エッセイ 千字文
沖縄の音色
新垣 俊道

2 特集
沖縄のくらし

2 本土の沖縄展示
——民博と海外移住資料館を見て 安里 進
4 泡盛と古酒文化 萩尾 俊章
5 「うろこ取り」について 大湾 ゆかり
6 神女の衣装 小禄 裕子
7 石垣島のソーロン（盆）
——四カ字を中心に 大濱 憲二
8 戦後沖縄と英語学校 呉屋 淳子
9 沖縄スポーツのゆいまーる精神 仲本 兼進

10 集めてみました世界の○○
帽子編
丸川 雄三

12 みんぱく Information

14 文化遺産おもてうら
文化遺産は誰のもの?——越境する人形劇ワヤン
吉田 ゆか子

16 多文化をあきなう
大学生とフェアトレード
大野 敦

18 味の根っこ
フォイトーン
宇都宮 由佳

20 人間学のキーワード
ビッグデータ
丸川 雄三

21 異聞逸聞
困ったときにはゴッドファザー
関 雄二

22 制服の世界、世界の制服
人民服
——20世紀中葉に中国で隆盛した制服系ファッション
横山 廣子

24 次号予告・編集後記